

# 山と博物館

第10巻 第5号 1965年5月25日

大町山岳博物館



## 遭難防止は組織化で

青葉若葉の間から残雪豊かな北アルプスの連山が五月晴の青空を背に聳え立っている姿が望める。ヤマザクラが散り始め遅い信濃の春は今まさに過ぎ去ろうとしている。今は何事もなかつたようなたゞまいをみせているこの山々が、先のゴールデンウィークの間中に何と五七人もの生命をのんだのである。今年には特に異常天候という条件も重なつたとは云え五七人の遭難とは余りにひどすぎたその上悪天候は関係機関から前もつて予報され、警告は充分出されていたのであるからマスコミが待つてましたとばかりに書き立てたのも誠にものごとくであらう。

無謀登山、神風登山と批判され、遂には山で死ぬのは勝手だが、後始末の出来ぬ奴は登らすなとばかりに惨々たるかれ方であつた我々も山岳関係者の一人として何とも言いようのない自己嫌悪と憤りの入り混つたものが胸元にこみ上げてくる。

さて折角大衆スポーツとして発展して来た登山が無秩序状態に陥つてゐることにその原因があるとするならば我々は県や国に山岳遭難対策を要請する前に岳界自体のそれに対する努力が如何に払はれて来たか反省する必要がある。登山者の一般的モラルの向上や山岳遭難に対して岳界は消極的な態度のそしりをまぬがれないではなからうか？現在のまゝだと例の登山規制を強行されても最早それを撤回させる足掛りがなくなりそうである。

そこで一日も早く岳界が登山人口を組織化(日本山岳協会傘下の山岳団体に全てを吸収)して、全ての登山者は必ず山岳団体に所属するよう努力すべきであり、それにより安全登山を徹底させ最低のスポーツという汚名をそゝがねばならない。岳界が海外登山に示した程の熱意があればそれは可能な筈である。

ノルウェー便り(その2)

## 「バイキングの船の家」を訪ねて

太田 昌 秀

私は二ヶ月半ほどオスロ大学の学生寮で、ノルウェーの学生達と一緒に暮らしました。

つき合つてみるとみんな本当に人の好い明るい青年達ばかりでしたが、どういうわけか、フランスやイギリスに対して文化的な劣等感をもっているようでした。(ドイツに対してはみんな激しい敵意をもっています。)彼らによると、「吾々の国は文化の伝統がなくみんな田舎者で、人づき合いの礼儀も知らない」といいます。しかしなまじ文化を鼻にぶらさげて、鼻声でフランス語をしゃべられるよりも、カチカチのデッサンカインをかじつて人なつこく笑いかけてくるこの国の人の方が私にはとても親しみやすく思われました。

ところで彼らは昔のノルウェーは素晴らしいところだと言います。それは、彼らの祖先のバイキングの時代のことをさしているのです。

バイキングは決して野蛮な海賊ではないのです。近年になるまでバイキングの時代の歴史はノルウェーやアイスランド(大西洋の北の方にボツンとある火山島)の古い物語(Sagaと言います)を通じてしか知ることが出来ませんでした。

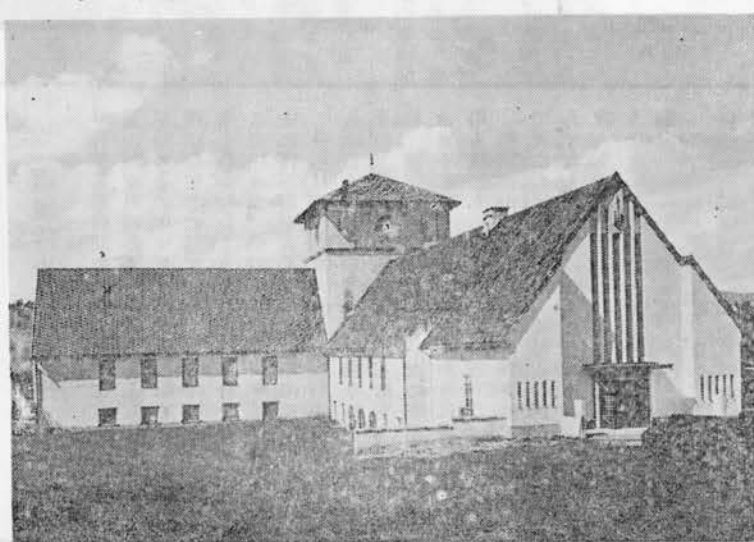
十九世紀になつて近代科学が発展してくると、歴史の学問も次第に科学的になり、事実を正しくつみあげてものを考えるようになりました。古い物語や書物は非常に古く、古い時代のことを知らせてくれますが、書いた人の考えや、書かせた人の意向によつて本当の事がねじまげられていることがどうしてもあるものです。従つて正しい歴史はこうした書

かれたり、語られたりして伝えられて来た歴史を事実で裏づけ、どこまでが事実で、どの部分がつくりごとであり、個人的なあるいは特定の人の都合よく並べ直されてしまつてはるかを明らかにすることからはじめなくてはなりません。

みなさんの中には、木崎湖の森の城跡で土器のかけらをひろつた人もあるでしょうし、長畑の発電所の裏でヤジリ石をみつけた人もあるでしょう。そういう私達の祖先の残していつた遺物は、何よりも雄辯に、ウソをつかず、当時のことを私達に知らせてくれます。近代的考古学や歴史学はこういうものを基礎にして、歴史を再検討しているのです。

その結果これまでに古い王様の物語や、勇ましい戦いの物語として、人々の間に語りつがれてきたバイキングの時代のことを直接に知る手がかりが、いくつかがみつかったのです。その中で最も大切なのは、海の勇者バイキングの象徴である「船」です。

つさり出てきました。女王様の外に若い女の骨が一緒に埋められて、これは女王の召使いの一人が一緒に埋められたのだらうと考えられています。その外に馬や犬の骨が何体もあり、美しいかざり彫刻に包まれた素晴らしいソリが二つ、四つ車の馬車が一、ナベ(カマはありますが、食器、衣類まで立派なものが一世代分あり、船は南に向けて埋められていました。当時の人々は、きつと人は死んでからも別の世界に生れかわつて、この船や家具を使い、召使いにかしづかれて幸せに暮すように祈り、またそうであることを信じてこの「船のお墓」をつくつたのでしよう。この船は広いところの幅が五・二m、長さが二一・五mあり、船体はカシの木で作られ、マストは松でした。水樽の大きいのが中央にすえてあつて、両側には十五対のオール(櫓)の穴があり、三十人のこぎ手がカイを握つて北の海の荒波と戦つたのでしよう。船のへさきと、しつぽは美しく彎曲して、抽象化された怖ろしい顔の怪物が刻まれています。魔除けなのでしょう。何といつても実に美しい形をしています。やさしい美しさではなく豪快なものです。この船でヨーロッパを荒しまわつた勇者達をしのぶにふさわしい姿です。さびついたオノ、かけてボロボロになつた木のオワンやスプーン、どれもこれもが当時の人々の暮らしを誠実に示しています。

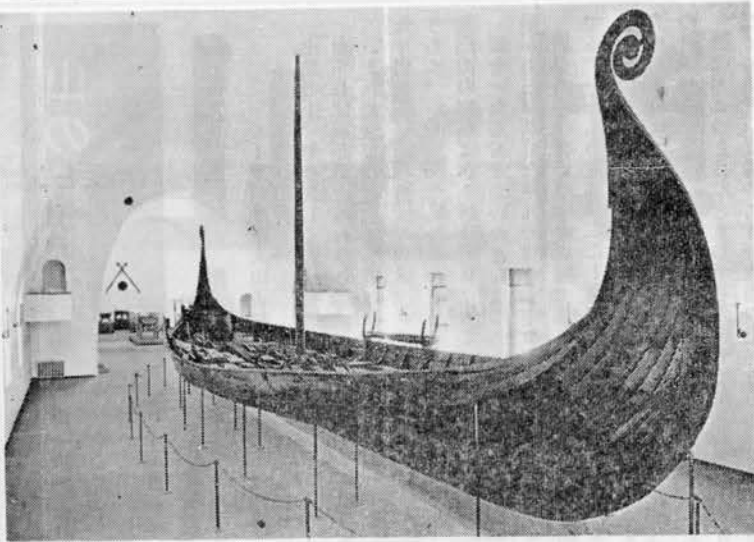


(バイキングの船の家)

刻まれた彫刻の一つ一つからは、心ある人は当時の人々の信仰までもを知ることができるでしょう。

これらの出土品はオスロ湾につき出した小さい半島の中にあるForks Museum(民俗博物館)の「C」バイキングの船の家」におさめられています。ここは古い考古学研究所もあつて、立派な建物の中にどつかりと三つの

船が並べられ、あらゆる角度から見ることができるようになっています。真白にぬられた天井の高い部屋に、この船が並んでいるだけそれだけで充分見ごたえのある博物館になっているのです。物の名前を書いただけの説明板があつてノルウェー人はみんな黙つてみています。稀に金髪の美しいお母さんが子供にパンフレットを読んでやつている位です。みんな何を考えながら自分達の祖先の残したものをしているのでしょうか。同じ血が流れていたら、きつと沸きたつような感激を味わつて



(オスベルグで発掘された船)

の活動をたずねてみましょう。八世紀以前には、この国はまだ原始的生活様式の中で暮らしていました。特に寒い北の国(カムチャツカに相当するほど北です)で、大昔の水河が消えたばかりの土地にすみついた人々は、谷間の小さい耕地に散らばって、バイキングよりも少し前に定着農業をはじめたばかりでした。どの家も孤立しているの、商業的取引は発達せず、氷河のけずったけわしい山々は人々の交流を妨げていました。そんなわけでノルウェーが最初に統一されたのは八七四年(A.D)でした。しかしVikingと呼ばれる人々(古ノルウェー語でVikingr=ingr mikill=great sea-faring warrior)は当時すでに

ギリス、アイルランド、アイスランドなどに住みついており、最初にバイキングがフランスに上陸したのは七九九年で、イギリスの港町のいくつかはすでにバイキングのものでした。八六二年までにはスペインや南フランスのロヌス川流域までバイキングが荒らされていきます。八五七年にはバイキングの活動はノルウェーの統一以前から延々と続いていたのですが、国が統一されるとその王様が大将になって、組織的に侵略をはじめたのです。ひと口にバイキングといってもスウェーデンもデンマークも含めての話で、これらの国はNormanという一つながりの人々が住んでいたのです。幾人もの王様が数百年の船を運んでイギリスやフランスに押しおたり、勇ましい戦士をしては、バイキングがそれらの土地に住みつき、植民地(この国の歴史家はコローニといっています)を残してきました。ある王様は連戦連勝の末、春先に凍った湖を渡っていて、氷が割れておぼれ死にました。その息子はロシアで勉強していて、数年后突然イギリスのテムズ河に大軍をひきいて現われ、イングランドの王様をやつつけ、ロンドンも風前の灯でした。ところがこの王様はキリスト教に染まると急におとなしくなつて自分の国に帰り、国中の者にキリスト教徒になれと命令し、数年にして古い宗教を一掃してしまいました。その息子は又もやロンドンに迫りましたが今度は教会を建てることを教わつて戻り、国中に教会を建てました。それ以来この国には「国教」といつて国が定めたキリスト教の宗派があり(今はルーテル教会というのがそれです)、王様が坊主の親玉で少しし不幸なことにこのキリスト教

の導入は坊主のいばる道をひらき(日本の道鏡、清盛入道の如し)、バイキングは国内紛争のため次第に弱りてゆきました。しかし八世紀から十二世紀にわたる全盛時代には、バイキングは大西洋を押しつたり、グリーンランドを発見し、更にJohann Erikssonという男は北アメリカ大陸を発見しています。これはほぼ千年頃のこと、コロンブスよりも五百年も前の出来事です。坊主の時代に入ると世は戦国時代となり、一一三〇(一二四〇年まではCivill War)直訳すれば市民戦争ですが、実は市民は迷惑をうけただけで、坊主と貴族が世の中をひつかきまわっていたのです。この間ヨーロッパの南の国々では、近世の都市市民の発達を土台に商人階級が大きく成長し、カソリックと封建貴族を圧倒して、商業同盟(ハンザ同盟)同業者の協同組合を基礎にしている)を作り大いに国力が上つてきました。ノルウェーは集落が散在していて、商業都市が発達できなかったところへ、一三九九年初秋、西海岸からイギリス船がバストという強力な伝染病をもちこみ、更にその後一三五九年と一三六〇年には天然痘がはやって、国民の三分の二が死にました。三〇〇人の偉い坊主のうち残ったのは四〇人、二七〇あつた貴族の家が六〇に減つてしまつたということです。かくして中世初期のヨーロッパに突如現われた海の勇者達は急に神様に飼ひならされた猫のようになり、仲間同志でひつかきつこしていたので天罰が当つて、ベツチヤンコになつてしまつたのです。

私は二月の末に「バイキングの船の家」を見に行つてから二冊の英文のノルウェー史とこの国の高校生の歴史の本をよんだだけです。が、そこでは依然として、王様の系図と貴族の有名な物語が多くを占めています。一体この「ノルウェー」の壮拳を両手に船のカイを握つて築き上げた大勢の人々の祖先はどうだつたのでしょうか。私はそれを知りたいと思



新らしい

スタンプを作る!!

います。王様が自分の成功を後の世に残そうと誰かに命じて語りつがせた物語の歴史ではなく、あの美しい船を作り上げ、手にマメを作つて大西洋を押し渡り、荒波と闘つた人々の努力こそがバイキングの歴史を創り上げたのです。科学的な考古学や歴史学はきつとそういう民族の歴史を明らかにするでしょうし、そうしたらこの国の若者もフランスイギリスの貴族文化に劣等感をもたなくなつてもと明るくなることでしょう。どんな民族でもきつと誰にも恥じない素晴らしい歴史をもっているものです。

(北海道大学理学部在オスロ)



## 山の詩歌碑

福沢武一

## 香取秀真歌碑

—東筑摩郡入山辺村三城牧場—

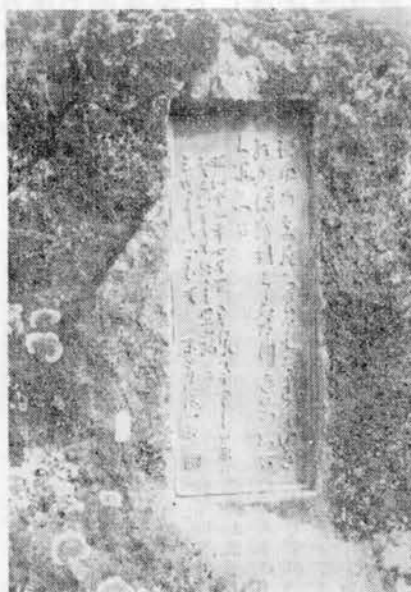
七曲の上。やや久しく別れを惜しむ。ここを下れば美が原ともおさらば。

いよいよ急な坂をくだり初める。たたまつた片岩がざらざら崩れる。ジグザグを繰返すうちに、いま別れた尾根の岩壁が遠ざかる。茶臼山の岩頭ばかりがそそり立つている。

坂を一たんおりついたところに小さい山小屋がある。新鮮な牛乳で喉をうるおす。

林をぬけ、ブナの木の間を綴るスロープにでる。一めんの芝地。ここ一茶臼山と王が鼻との山隈の一面が、三城牧場。ここに香取秀真氏の歌碑を訪れること、これがさし当つての目的だ。

碑はちよつと目にとまらず、売店で所在をたずねる。いま通つてきた牧場の上べりらしい。重い足を励まして傾斜地をとつて返す。牧場への入口……林への出口であり、登山路



の入口、——それはどこと定まつていない有様しかし、思つたよりもたやすく碑は見つかる銅板がはめこまれている。

つかつかと近づいて、その前に立ちつくす。——さし渡し五メートル、高さ二メートル

にも及ぶ大きな岩。それも岩頭を露出しただけの自然石。その濃い古色の中に銅板がこじんまりとはまつている。それは、高さ七三センチ、幅二三センチ。これまたすつかり緑に変色し、横陽をまともに受けている。流麗な筆致。精巧な鋳造。一代の詩金家の作だけのことはある。

なにはともあれ、拓本を初める。——変体仮名の一字々々が鮮かにうちだされてき、わ

つゆのそらなくはれてゆきのころのりくらだけをまちかくぞみる

昭和十四年七月一日、さそはれてうつくしが原に登らむとしてつつじの散残る三城にいひて かとりのはつま

歌集「還暦以後」(昭和二年)には次の詞書きが綴られている。

とにやすらひつ、

香取氏は明治七年、千葉県の生れ。それが碑文の落款にしつらえられる。すなわ

ち、——明治甲戌一月元旦生……長じて東京美術学校卒業子規門下としてアララギ派の先進の一人でもある。

詩金家で、芸術院会員。文部省勲章を受けた。昭和二年、八〇歳の高齢で病没した。わが長野県には戦前から足をとどめ、戦後にわた

つて松本近郊に滞在し、数

々の歌と金石文とを残した。当碑の如きは、その中でも秀抜。つゆ晴れのすみきつた空気を通して乗鞍岳が目に入るさまが詠ぜられてゐる。きよきは、あいにく遠雲にかすんで見えないけれど……

小さい窪地一つ越えて、向うの高台にホテル風の建物が立つている。その前のスロープも牧場。遠まきにするブナの林にツグミの歌が続いている。それを聞き、牧牛を眺め、のびのびした気持を楽しむ。——ゆるゆると空へ立ちのぼっていくのは煙草のあおい煙。

## キセキレイ

長沢修介

漂鳥であるこの鳥は冬の積雪期になると、当地ではほとんど見かけることはできないが明科町附近の犀川流域では厳冬の一月頃でも少数越冬するのを見受ける。

雪消の三月下旬から四月上旬にかけて繁殖地へ渡つて来て、人家附近で繁殖をすませ、夏には溪流添いに上り二千米以上の高山帯の雪渓上迄もその姿を見せる。

今年の五月の連休を私は内蔵助平で過した。その時この鳥を黒部川本流、黒四ダム下にて目撃した。五月の初旬とはいへ黒部流域はまだ一面に二メートル以上の積雪があり、ダム下流の黒部川はまだほとんど雪の下で、所々に雪崩の大きなデブリがあり、流れが出ている所は大きく淀んだ所位のもので、キセキレイが餌を取れる状態ではなかった。

とりわけ今年は三日に大雪があり、どうしているか心配であつたが下山時にも同じ場所ですぐ元氣な姿をみて驚ろき、又ほつとした感じで



キセキレイ

## 表紙説明

5月の五竜岳

撮影 遠藤好一

山と博物 館 第10巻第5号

発行所 一九六五年五月二十五日発行

長野県大町市T.E.L.(大町)二二一

印刷所 大町市下仲町 大町山岳博物館

大糸タイムス印刷部

もあつた。そしてこの谷にも間もなく春が来ることを身近に感じたものだった。

お願い「山と博物」の購読者をつのつております。年間三〇〇円(送料共大町山岳博物館宛お送り下さい)。